

事業計画の見直しと次年度モニタリング計画

平成31年3月14日

国土交通省 中部地方整備局 豊橋河川事務所

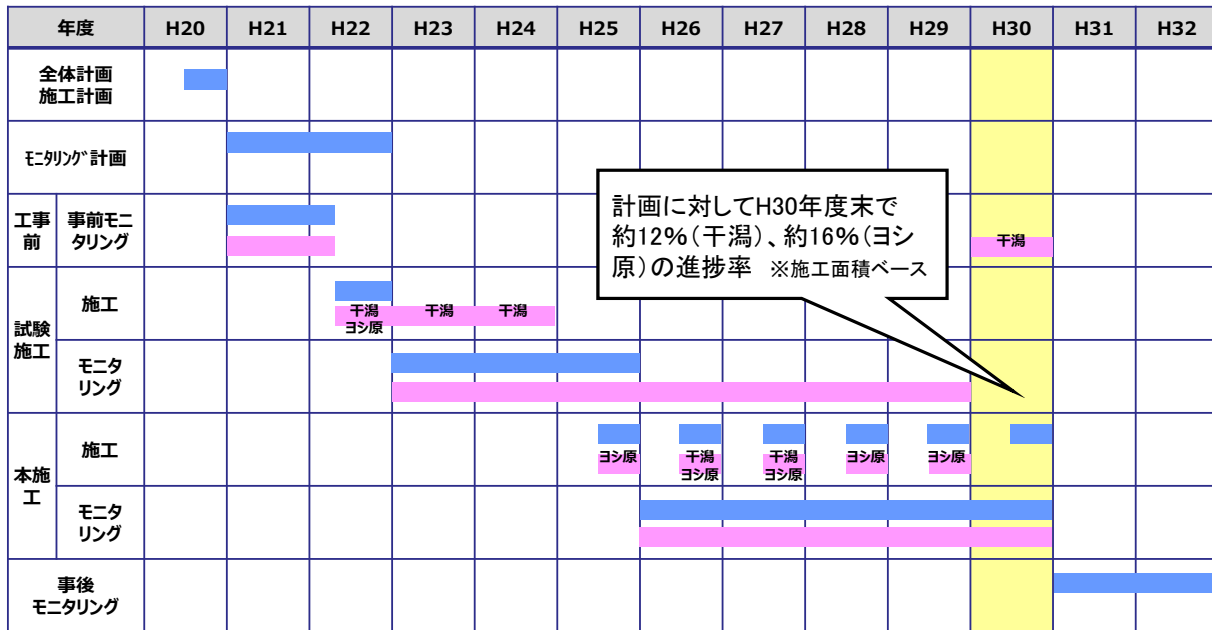
目 次

1. 矢作川自然再生事業の経緯、進捗状況
2. 事業計画の見直しについて
3. 次年度モニタリング計画
4. 平成31年度調査内容（案）

1. 矢作川自然再生事業の経緯、進捗状況

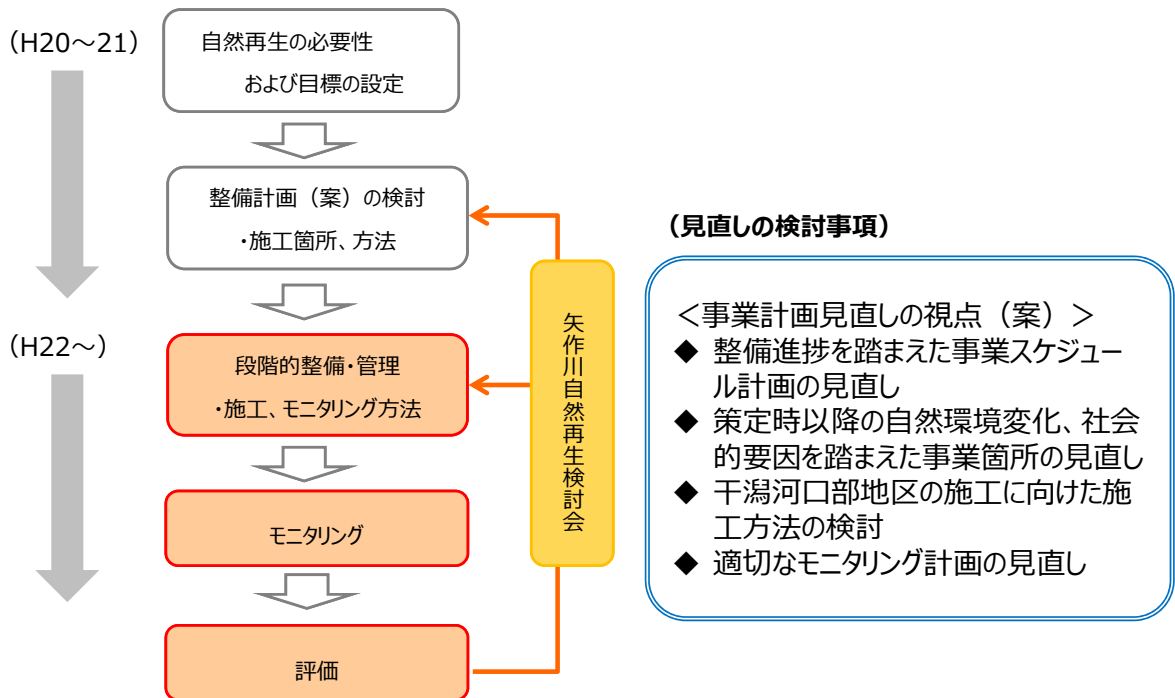
- 全体計画に対してこれまで段階的な施工を進めているが、平成30年度末時点において干潟の整備進捗約12%、ヨシ原16%の状況（平成30年度は施工なし）

◆自然再生事業スケジュール進捗



2. 事業計画の見直しについて

- 平成21年度の矢作川自然再生計画書の策定より、これまで段階的な事業を推進
- これまでの整備進捗（スケジュール）やモニタリング等による効果の発現状況を踏まえ、今後の事業計画の見直し、事業計画へ反映
- また河口域への干潟施工に向けた施工方法を検討し、事業計画へ反映



2. 事業計画の見直しについて

- 平成31年度に、既往検討や現地調査結果にもとづき、事業計画(目標、箇所、方法、スケジュール、モニタリング計画等)を見直す

◆平成31年度以降の検討・調査スケジュール(案) ※スケジュールは適宜見直す

項目	H30年度				H31年度					H32年度			
	2~3月	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月
検討事項	矢作川自然再生検討会 (今回)				◆事業計画の見直し ・事業目標 ・事業箇所 ・施工方法 ・事業スケジュール ・モニタリング計画					矢作川自然再生検討会			
調査事項		事前調査(河口部左岸)				干潟・ヨシ原モニタリング調査				干潟・ヨシ原モニタリング調査 (見直し後)			
					事業評価アンケート								

4

3. 次年度モニタリング計画

- 次年度は自然再生モニタリング調査として、既往施工区「干潟0.6k左岸付近」「ヨシ原6.0k左岸付近」の施工後モニタリングを行う
- あわせて、これまで未調査であった「干潟河口部左岸」の現況把握調査(事前調査)を行い、事業計画の検討(施工箇所、施工方法等)に反映する
- モニタリング調査項目は、既往調査と同様とする

◆次年度モニタリング方針

■自然再生モニタリング (事後モニタリング) 干潟、ヨシ原 ～事業効果の検証～

- 効果検証モニタリング※
- ヨシ原6.6k左岸付近
(施工後2年目)
- 維持管理モニタリング※
- 干潟0.6k左岸付近
(施工後9年目)
- ヨシ原5.4k左岸付近
(施工後9年目)
- ヨシ原6.0k左岸付近
(施工後6年目)

■現況把握調査 干潟(河口部左岸) ～未調査箇所の 現況把握～

- 事前調査
- 干潟-2.0~-0.6k左岸

自然再生事業計画
の見直し

◆干潟・ヨシ原再生箇所(計画)



※自然再生計画書にもとづき実施

- 効果検証モニタリング(短期:3~5年程度)
- 維持管理モニタリング(中長期:5~10年程度)

5

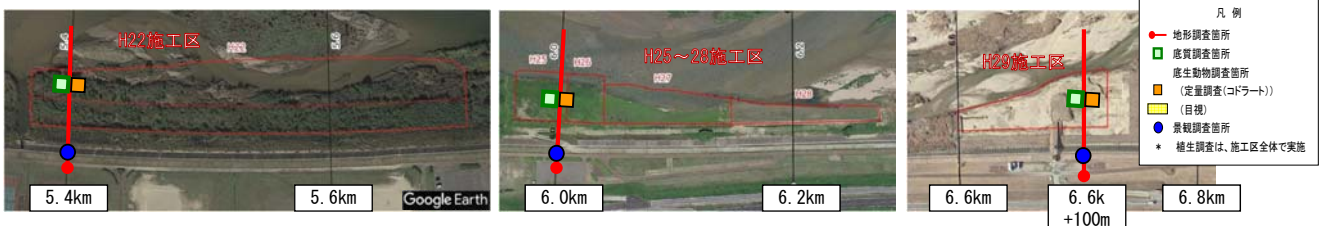
4. 平成31年度調査内容（案） ヨシ原施工後モニタリング

- ・ 事業効果を把握するため、地形、底質、植生、底生動物、鳥類、景観をモニタリング
- ・ 調査項目は既往調査と同様とし、各施工区の代表箇所（継続調査地点）で実施する

◆ヨシ原 事後モニタリング調査

項目	調査目的	調査内容・手法	調査時期	数量
地形	植生生育の基盤地形を把握	横断方向の地形測量	出水期後	3 測線
底質	底質表層の分析・抽出	粒度組成、強熱減量 (現地計測、室内分析)	春季、秋季	3 箇所
植生	ヨシ等の植生分布把握	植生図、植物相	秋季	3 箇所 (施工区全域)
底生動物	底生動物相、生息密度の把握	定量調査コドラート法 (室内分析)	春季、秋季	3 箇所
		定性目視 (現地計測)		3 箇所 (施工区全域)
鳥類	鳥類の生息状況把握	定点観察	冬季1回	1 回 (施工区全域)
景観	ヨシ原景観の把握	定点撮影	春季、秋季	3 点

※調査位置・数量は、現地状況を踏まえ、適宜変更する



6

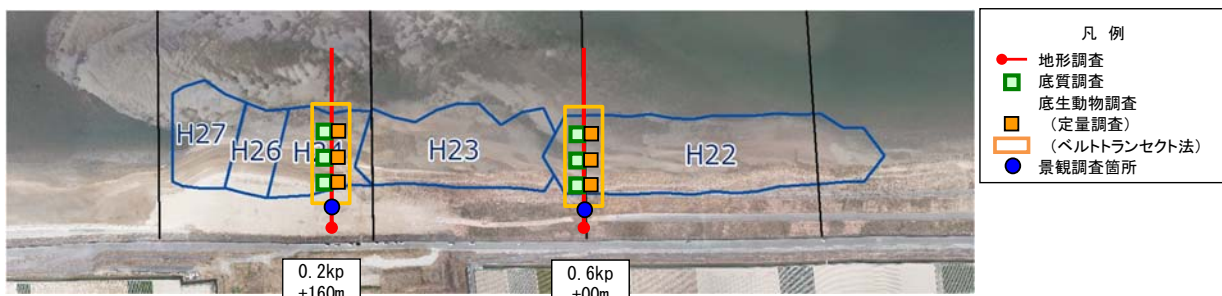
4. 平成31年度調査内容（案） 干潟施工後モニタリング

- ・ 事業効果を把握するため、地形、底質、底生動物、景観をモニタリング
- ・ 調査項目は既往調査と同様とし、各施工区の代表箇所（継続調査地点）で実施

◆干潟 事後モニタリング調査

項目	目的	調査内容	時期	数量
地形	干潟の基盤となる要素であり、干潟の形状の変化等の状況について把握する	朔望平均干潮位付近までの地盤高の計測	秋季	2測線
底質	底生動物の生息を規定する要素であり、干潟における底質の物理的性状と化学的性状を把握する	粒度分布 (ふるい分け+沈降)、ORP、強熱減量 ※表層採取 ※各測線で3検体 (沖側、中央、堤防側)	春季・秋季	3項目 ×6検体
底生動物	干潟生態系で重要な生物群であり、施工前の分布状況や生息密度について把握する	定量調査 (表層)	春季・秋季	6検体
		定性調査 (ベルトランセクト法)		2測線
景観	人の利用面を含めた干潟景観を把握する	定点撮影	春季・秋季	2地点

※調査位置・数量は、現地状況を踏まえ、適宜変更する



7

4. 平成31年度調査内容（案） 干潟河口部現況把握調査

- ・ 河口左岸部は未調査地区であり、事前調査により現況把握を行い、施工検討等へ反映
- ・ モニタリング調査項目は、平成30年度右岸調査と同様とし、年2回の調査を実施

◆干潟 河口部左岸 現況把握調査

項目	目的	調査内容	時期	数量
地形	干潟の基盤となる要素であり、干潟の形状の変化等の状況について把握する	朔望平均干潮位付近までの地盤高の計測	秋季	8 測線
底質	底生動物の生息を規定する要素であり、干潟における底質の物理的性状と化学的性状を把握する	粒度分布（ふるい分け+沈降）、ORP、強熱減量、硫化物 ※表層採取 ※各測線で2検体（地形変化点）	春季・秋季	4項目 × 16 検体
底生動物	干潟生態系で重要な生物群であり、施工前の分布状況について把握する	定性調査（ベルトランセット法）	春季・秋季	8 測線
景観	人の利用面を含めた干潟景観を把握する	定点撮影	春季・秋季	2 地点

※調査位置・数量は、現地状況を踏まえ、適宜変更する

